

雑報

雑誌名	龍南會雑誌
巻	9 8
ページ	6 6 - 1 0 0
発行年	1903-03-31
その他の言語のタイトル	雑報
URL	http://hdl.handle.net/2298/5528

○小松宮殿下の薨去

竹園風荒みて、長幹は折れぬ。國家運凶にし
て、柱石は倒れぬ。悲しき哉。小松宮彰仁親
王殿下には、二月十八日を以て、溘焉、薨去し
給ひぬ。

回顧すれば、丁酉十一月、殿下親しく、駕
をわが校に枉げさせ給ひ、次で、客年晩秋、再
び、御貴臨の榮を賜はり、玉容、髣髴として、
今なほ目にあり。わが校生徒の殿下を仰ぎ奉
る、情自ら切なるものあるに、一朝、御訃音を
拜して、誰かまた、哀悼悲痛の情に勝へざらむ。

殿下、金枝玉葉の御身にして、閭外重寄の大
任にあたらせ給ひ、武功赫々たるは、更にもい
はず、その文勳の偉大なる、上下萬民の、齊し
く頌し奉れるところなり。國家益々多事ならむ
とし、殿下に待つところのもの多かりしに、

今や、則ち、薨去し給ひぬ。畏けれど、至尊の
大御心を恐察し奉れば、血淚滂沱、抑々んとし
て、抑ゆる能はざるなり。

二月二十六日、天に慘雲わき、雨をよびて暗
澹たる色を呈し、地に悲風起り、梢に咽びて悽
惋の響を齎らせる時、我校職員生徒一同、体操
場に出で、神籬を場の巽に設け、遙かに、御柩
の豊島が岡に向はせ給ふを拜す。極みなき悲愴
は、天地に満てり。一同、悄然として頭を垂れ
、敬悼の微衷を表しまつりぬ。

冀くば、在天の英靈、永遠に、皇土を冥護し
給はむことを。
謹みて記す。

○演説部大會記事

二月三日、月黒く星稀なる夜、演説部大會
演説競技會が、例の瑞邦館で開かれた。今の世
は實に競争の世の中で、その聲を聞いては雙も
爲に躍り、その状を見ては盲も爲に起るのであ

る。我が龍南會の各部も、競漕の如き、マツチの如き、勝負の如き、競射の如きがあつて、各活氣を帯びて居る。で演說部委員も、其部の盛大を謀りて、これに倣ひ、各部より選手を選びて其技の優劣を争はしむると云ふ揭示が、數日間生徒控所の板壁に、塞むさうに貼れた結果、好成績を來たして、常よりはより多くの聴衆を得た上に、其等の人も満更煎餅のみの目的ではないやうに見受けた。

先づ花田委員立ちて、大會の主旨、即ち由來演說部が殆んど一部生占領の様なるを憂ひ、三部の諸氏にして尙演壇に立ち得る權能あるとを證せん爲め、又一には萎靡せる此會を振はしめん爲めなる由を告げ、又選手諸氏は各部の責任を負へるものなれば、充分力むる所あらんことを望みて壇を下つた後、審判の諸教授が、右に投票紙を持ち、左で髯をひしりつゝ、演壇の正面に居並ばれた時始めて幕が落ちて、競技の本舞臺は現はれた。

三部生をして泣かしめよ 三部 小川勇君

誰か人として、己の職業を失ひ、糊口の道に窮するに至りて泣かざるものあらんや、實に我が三部生をして泣かしむるは諸君の健康なるにあり。人の健康を好みて、病魔を忌むは、余か言を待たず、しかも人は好んで病に走りつゝあるは何ぞや。余は特に之を學生に見て四原因を得、一に曰く成功を急ぐ事、二に曰く法則無視、三に曰く人生問題、四に曰く社會の制度是れなり。

一、或は名譽心の爲め、或は一家の事情の爲めに、學生は成功を急ぎ、從て過度に勉強し、遂に腦神經衰弱に愚痴をこぼすに至る。

二、已を以て法則の除外例となすものあり、酒を飲み、菓子を食ひ、或は過度に勉強して、尙已に害なしと誤信せるものあり。然れども生理上、衛生上の天則是此等の者を許容するものにあらず、不知不識の間に不健康に導きつゝあるや明かなり。其不攝生の結果の直接に現はれざるは、元來此等の者のより健康なるに由るのみ。

三、人生の意義、人生の目的、一度は是等の間

題に想到して、腦を苦しめざるものはなからむ。是實に腦神經をして衰弱ならしむる一原因たらずんばあらず。

四、特に學校試驗制度の如き、是か爲に病を得るもの實に少なからず、而して遂に吾人は試験を無視する能はざるなり。

是等の事は實に吾人が大に考慮を要する所、徒に目前の利に迷ふて、其大目的、大眼目を忘るゝが如きは、吾人が探る所にあらざるなり。夫れ現時日本の要求しつゝあるは、唯健全なる身体、健全なる精神を保てる大偉人なるにあらずや。諸君、諸君は決して三部生に好意を表する勿れ、宜く敵意を保て、而して我三部生をして大に泣かしめよ。

新聞紙論

一部 小野彥三郎君

近世自由思想、權利思想の發達より、君側の權衰へて政府に移り、政府の權衰へて議會に移り、議會の權衰へて新聞紙に移る、實に今日の新聞紙は古の春秋なり。夫れ新聞紙の務とする所は、あらゆる天地の新現象を最も速に報導するに

あり、其文辭の如きは、遲にして巧ならんことを期するのみ。され、新聞紙は目下の出來事を其儘に報導し得たりとて、能事終れり盡せりと爲すものにあらず。能く其事相を観察して、時に社論、社説を加へ、世の人士を誘導し、懲戒し、稱譽し、攻撃し、以て社會の木鐸たらんこと、是れ即ち新聞紙の本領なり。今や彼は或は社會改良に絶叫し、或は道德養成を獎勵し、或は政府の命令、議會の決議を批し、或は内治外交の政策を是非し、或時は又國民教育の大機關となり、或は勸善懲惡の大寺院となり、將に其勢力は天下の人心を支配す。然れども又新聞紙が、社會の風儀を紊亂するの導火線となるもの少なからず、是實に其編輯に意を用ゆべき所以なり。今や通信機關の完備は、一瞬時の間に能く宇宙の新現象を聞くを得、されば新聞紙は其範圍を廣大にし、其材料を精選せざる可からず。而して又新聞紙の聲をして國民の聲たらしめよ、其政治家たりと、實業家たりと、軍人たりと詩人たりとを問はず、其抱懷

せる經綸を天下に發表し、輿論を惹起し、一代の人心を感化し、一世を改良し、天下百世の大政策を明にすることを務めざるべからず、此の如く社會と新聞紙とは常に相一致して、人民は凡ての問題に就て總ての人の意見を聞くを得べし。於是乎新聞紙は社會の耳目を引き、社會の本鐸となり、人民の生活に一日も欠ぐ可からざる利器たるなり。是れ即ち新聞紙の聲は、やがて國民の聲、其思想はやがて國民の思想、其感情は又やがて國民の感情にして、乃ち新聞紙夫れ自身が國民夫れ自身たるもの、是に至つて始めて新聞紙の能事到れりとなすものなり。

幾何學を論じて其二分料に及ぶ

二部 河野徳助君

雜報子不能、悲しくも遂に其卓説を筆記する能はなかつた、で後に草稿を乞ひしに、又折を得て雜誌に投書せんとのことであつた。

氏の演説終りて、中幕としてマルチン氏及びブラウン氏の、マンドーソンとギーターとの合奏があつた。耳慣れぬこととて何とも分らな

つたが、然し其何とも分らぬ處に、又何とも分らぬ興味を感じた。

新日本の勃興

一部 今岡信一郎君

中世を経て近世に入りての、文學、技藝、哲學、科學の發達は實に吾人の眼を驚かすものあり、或は合衆國の獨立、博愛的慈善的事業の發生、赤十字社の創設、奴隸解放、白痴教育、孤兒院の設立、是等の事實に是空前の光彩なり。而して此光彩は那の邊に基づくものか。抑中世暗黒時代にありては、羅馬教會の下に自由の意志は拘束され、人は皆生存の意義を失せり。然れども一たび亞刺比亞の光明西班牙に輝き、文藝復興伊太利に現出してより、世は漸く活氣を帶び、古代文物の研究にて始めて自己存在の意義を明にし、國民的自覺又此處に發し、又此か爲に國民文學の隆盛となり、國家中央集權の實は擧げられ、文學科學の發達より宗教改革成るに至りて、人は精神的の立脚地を得しなり。かの近世の活氣と光彩とは實に此大精神に基礎を保つものなり。而して今や我國に於て此現象を見る、

來日本は島國的にあらず、徳川三百年の鎖國は國家の爲め悲しむべき現象なりしなり、然れども國民は此保守的政策に安んずるものにあらず、幾多の豫言者は其末に出で、國民的自覺を喚起し、遂に維新となり封建は破れて立憲代議の花を見るに至る、次で日清戦争となり、臺灣占領の地理的膨脹となり、日英同盟となりて、我國は將に大日本と生長し來れり。然れども此くして止まば是恰も歐洲近世史より宗教改革を除きたるものなり、吾人は將に地理的膨脹と共に精神界の大開展を謀らざる可からざるなり。現時我國の精神界は無統一、無意義、無希望の内に葬られつゝあり、明治の始め西洋文物と共に耶蘇教が我國に注來してより、從來の佛教儒教と大衝突を來し、大波瀾となり、大渦卷となりて、遂に今日の狀を見る。今や世界の文明は悉く注いで我國にあり、是日本民族が將に自覺して起つべきの秋なり、東西二大文明を調和し、更に新に世界的大文明を生み出し、世界をして新日本の光に浴せしたるは實に我民族の責任ならず

や。地理的膨脹には限りあり、日本民族は心靈的に世界を征服し、世界を風靡すべきなり。日本をして世界文明の中心たらしめざる可からざるなり。吾人は將に大理想大抱負を以て、文明史が吾人に迫りつゝある天職を盡さざる可からざるなり。

科學者は世の光なり 二部 高田 景君
硝煙彈雨の間に奮戦し突戦し、敵將の首を提げて大勝利を叫び、或は政界の波瀾に乗じ、滔々の辨、縦横の筆、以て敵黨をして後に瞠若たらしむる、是將に男子の快極まれりとなす所なり。然れどもかの自然の大を敵とし、奮進身を忘れ、一度光明の閃めくありて一大發明を成就する科學者の壯快に至りては、未だ是等の夢にだに見る能はざる所なるべし。實に科學者の目的は宇宙にあり、萬有にあり、豈大ならずや。或は春の野に蝶を追ひ、或は山に草木をたづね、未現の眞理を發くにあり、豈又快ならずや。而して此等のとかの俗利に汲々たる者に向て望む能はざるなり。科學者の快樂は實に超然的快樂に

して、眞正の快樂は科學者にして始めて解し得るものなり。今や科學の進歩は大に見るべきものあるも、尙吾人の知らざる所は、吾人の知る所の幾倍なるかを知らざるなり。試に思へ電氣の本性の何たるかは、未だ知る能はざるにあらずや、夫れ幾多未現の秘密は吾人の至るを待ちつゝあるもの、吾人科學家たる者又大に力めざるべからざるなり。微虫も尙完全なる生活をなし、雲間の月星は幾万年を経て其軌道を外れざるが如き、宇宙自然の法則が萬有を支配しつゝあるは、尙國家に憲法あるが如し。其法則を發見せんが爲に、觀察實驗に依り、或は歸納演譯に依り、身を捨て、命を忘れ、甘んじて危險に走りし者科學者に少なからず。而して社會の現狀を見よ、實に社會進歩の原因は、一として科學の力を借らざるなし。嗚呼科學者の力豈に又偉大ならずや。夫れ基督は世の光なりと、余は此處に於てか叫ばんと欲す、科學者は世の光なりと。

終りて又マルチン、ブラウシ二氏の合奏があつ

た、後遠山部長立ちて、投票の結果を報告され、賞を授與せられた。名譽ある受賞者は

第一等 一部 今岡信一郎君
第二等 一部 小野彦三郎君
第三等 二部 高田景君
である。

○學寮自炊紀念

天地漸く春ならんとして、我等の心の春なるべき日は來れり。二月十五日は、學寮第十二回自炊紀念日なり。例により學寮第二學期懇親會をも兼ね行ふ。この日や、洵に我等の追想すべき日なり、忻喜すべき日なり。雀躍すべき日なり。扑舞すべき日なり。其の喜びの叫を龍山の松に響かし、其の扑舞の音を白川の水に波だたしむべき日なり。

恰も日曜日なり。天は暖かに、風は軟かなり。前日より諸般の準備既に成れり。寮内各室には美術家、頓智家の思ひ思ひの裝飾あり。瑞邦館及食堂の内壁は、戲畫戲文を以て貼りつめられ

たり。殊に食堂の裝飾に至りては、その技巧を極めたるものあり。其の人口には兵士二人、銃劍を捧げて儼然として立てり。堂今の中央には白薔薇の花、露を含みて正に盛なり。近づき見れば、思ひきや之れ野菜を聚めて造れるなり。其の巧殆んど自然を奪へり。此の花の南壁に沿ひて、食器もて兒島高德が詩を櫻樹に題するを形どれるあり。晝と、花と、而して義烈の人と、一堂の裡抽象美、具体美、両つながら整ひ、彩華絢爛殆んど人目を眩す。

午後より運動場に於て擊劍野仕合及び角力あり。三百の健兒、腔中殆んど無一物なるに及びて、劇吠一聲、劇院として、習學寮を斜に響き、幽かなる余韻を龍山の松聲に止むるや、食堂には、無數の黒き頭と、満堂の珍味佳肴との間に、大活劇の一幕開かれたりき。がて夜に入るや、瑞邦館裡にて、滑稽劇の新意匠と技巧とを凝せる數幕は演ぜられぬ。曰く百鬼夜行、曰く英語狂言、曰く蓄音機、曰く何。此の間一同、新作の賽歌を唱すること二回、生徒音樂隊、幕合毎

に合奏す。而して最後に筑前琵琶を終りし頃、殆ど半夜なりき。心も身も空になりはてし、瑞邦館を溢るゝが如く流れ出でたる三百の頭顱は、只足の趣き手の向ふまゝ、何處を目當ともなく、無我無中に狂ひ、飛び、跳ねるめたり。南寮より北寮、北寮より新寮、めぐりめぐりて、連り行く幾多の行列の奇態妙趣、語も筆も及ばず。漸くにして彼等は狂ひ疲れ、飛び疲れ。跳ね疲れぬ。午前二時を過ぐるに及びては、囂々として、怒濤のごとき音響を、空に傳へしきしもの大活動も、全くやみて、天地大寂、空に星輝き、地に露結べるのみ。かくの如くにして終はれり、吾等寮生の最も祝ふべき日、最も喜ぶべき日は。

茲に尙は一つの記せざる可からざることあり。其は此の日食堂に於て、炊夫長立山嘉平次に、その十二年一日の如き、勤勉奮勵に酬ゆるため、職員及び寮生一同より、銀盃一組及び銀時計一個を贈與せることなり。自炊制度の成功は、炊夫の正直と、勉勵とに待つこと多く、炊夫の

正直と、勉勵とは、炊夫長の性格に待つこと多きは、言ふまでもなかるべし。吾が自炊制度の、今日の如き好況を呈するもの、其の功、過半は立山嘉平次の獻身的熱誠に歸せざるべからざるなり。

新作の寮歌は左の如し。

寮歌

は 調

5 5 5 3 5 1 1 2 1 2 3 2
ミ フ リ シ マ タ ル タ ツ ダ ヤ
くれなゐにほふあけほのに

1 2 2 6 6 5 5 3 3 5 5 2
ナ ガ レ シ ツ タ キ シ ラ カ ハ ヤ
すゑののさみなをそめいでし

3 5 3 5 6 6 6 5 3 5 3 5 6
ミ ツ ミ ヤ ク ラ シ ヤ ヤ サ ヒ
ミツはあいのばたさな

1 2 2 3 3 1 1 6 6 2 2 5
ミ ツ ミ ヤ ク ラ シ ヤ ヤ サ ヒ
みどり滴るたつ山

水に枕し山を背ひ
くれなゐにほふ曙に
時は明治のはたちまり

流れしつけき白川や
太しくたてる習學寮
末の望を染めいでし
なほ二こせの昔なり

ふりにしいらか仰ぎ見ば
愛さ平和にさざりゆく
故里さほく學ぶ身の
幾代の春はめぐることも

うましからずわか友よ
我等の歴史わくらす
まごめはさほに清けまば
つきぬゆるみびふに見る

濁世の闇はふかくとも
濁世の波はたかくとも
ささしの光めざしつづ
我等はまよはずたゆたはず

ささしの光なからずや
きよき流のなからずや
きよき流に棹まして
まふこの道をたどるなり

火雪ふがるる夏の日も
千巻の文をひもこいて
あい大鵬の翼ふらば
さほにかはらぬ心もて

吹雪ふきまく冬の夜も
雄々しき心養はむ
南天北地かけめぐり
濁れるこの世を導かむ

見ても空の星の影
聞けよ庭間の鳥の聲
あまたくへすやわが友よ
榮ある歴史つくりゆく

我等のゆくて照らすなり
我等のゆくて祝ふなり
はなある過去をかへりみて
睡びもまたた習學寮
(寮生の一人)

○庭球仕合

世人が運動の必要なるを知る久し。而して之れを行ふもの、日に月に多きを加へ、我校の如きも、近來各種の運動が著しく隆盛を來した、而かもテニスの如き、驚く可き隆盛を來したのは是れ此の技が、時間の關係上非常に都合のよき點から、簡單にして入り易い點から、余り過劇に失せず、身体の各部を圓滿に運動せしめ得ると云ふ點から、かくは隆盛になつたのであらう。兎に角、我部の爲に我校の爲め、喜ぶべき現象であると云はねばならぬ。

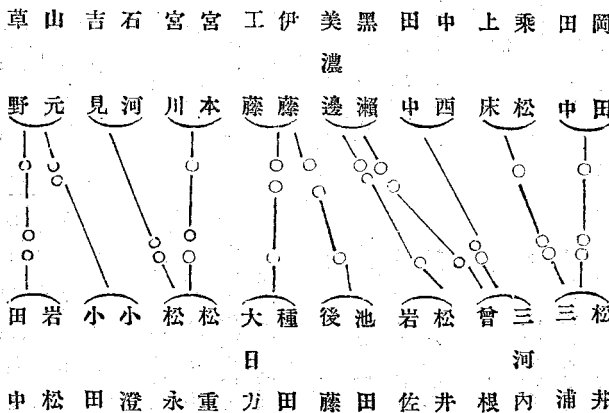
鳥漸く啼かむとし、花漸く笑まむとし、天地漸く春色を呈せんとする時、二月二十一日午後一時半より、我部は茲に本學期最終の庭球仕合を行なつた。

球の變幻出沒、人の千態萬姿、觀客快呼、彌次連の聲は、例によりて例の如し。
其の演技者の勝負經過を示せば。

七十四

紅

白



右終つて、演技者隨意の組を以て、勝負を行な

つた。

勝 負

黒瀬 美のべ

種田 松井

勝

黒瀬 美のべ

負

後藤 池田

黒瀬 美のべ

吉見 松井

宮本 大日方

工藤 伊藤

宮本 大日方

小田 小澄

宮川 石河

宮本 大日方

松重 松永

宮川 石河

山元 松

松重 松永

山元 松

草野 田中

終りて一同茶菓を喫し、談笑して散會した。

○討論會概況

二月廿七日午後七時半より、例によりて討論會を瑞邦館に開く。杉山、渡邊、長谷川、高木、二宮の諸教授及び松山講師既に座にあり、聴衆亦既に集ふ。花田委員先づ立ちて開會を告げ、當夜の問題たる、

二年兵役の可否

に就て説明して曰く、我國の財政困難を究め、

動もすれば軍備と衝突せんとするより、此問題
は先づ經濟學者によりて唱導され、天野博士の
如き其の有力なるもの。今その言に聞くに蓋し
三策あるが如しとて、統計を引きて詳細に説明
し、語を次で曰く、博士は三策中、第一策を以
て勝れるものとなすが如し。世人の是非するも
亦茲にあり。孰れか是、孰れか非。そは本夜の
辨士諸君の解決にまかせんとて、壇を下れり。
博士の三策なるものゝ概要は左の如し。

一、毎年の徵集人員を今日の儘とし、常備十三個師團に變更
を加へず、現役一年を短縮し、豫備一年を増加するにあり。然
る時は平時定員は減じて十萬となる。

二、現在の常備編制を動かさず、又其平時定員をも減少せし
めず、毎年の徵集人員を増して七万五千人、即中隊徵集人員を
六十人に増加するにあり。然る時は豫後備の兵員は、現時の一
倍半となるべし。

三、現在の徵集人員を増さず、又中隊の平時編制を減ぜず。
常備編制三分の一を縮少し、豫後備の編制を擴張するにあり。
今便宜に従ひ積極論者及び消極論者を記載せん
か、

積極論者

大井 治久君

惠利 武君

山室 宗文君

松山 講師

消極論者

福富卯一郎君

江崎 規矩君

木下 志朗君

二宮 教授

論議は先づ積極論者によりて開かれたり。

大井君。開口一番、吾人は二年兵役を可とし第一策に賛する者なりと叫ひ、るの理由を説きて曰く、二年制となさば現今十五万の兵員は五万を減す。この内將校、下士等を減すれば、大凡四萬五千の壯丁は、家にありて優に生産的仕事をなすを得べしとて、現今の日本を兵力よりも寧ろ富を要すとなし、北清事件に於て我經濟界は、僅か一個師團半の出師にさへ恐慌を來したるに非ずや。若し全國十三個師團を出すに至らば如何なる可き。故にかの四萬五千の人々をして社會的任務を盡さすべしと述べ、更に、二年制を採らば國家は七百萬圓を節減し得て、人民の課税を寛にするを得べしとて、詳かに説明し、更に進んで、論者は或は軍隊教育の如何を云々せんもこれ杞憂なりとて、統計を引きて説明

七十五

し、我國には日本魂あれば毫も意とするに足らずとし、且我國人の欠点として倦怠の性あれば、二年制は或は適當なる可しと説き、論者は亦訓練の如何を云はんも、かく云へば際限なく、四年五年或は六年も可なるべしと云ひ、軍隊の基礎たる中隊編制に論及し、終に臨んで例を北清事件にとり、二年制度を採用せる獨逸の好成績なりしを擧げ、佛、伊また之に倣はんとす。我國は商工業を以て富を致さる可からず。宜しく經濟の大勢に鑑みて、二年制度を採用すべきなりと結びて降壇。次で顯はれたるを福富君となす。曰く、反對論者は皆好奇心に驅られたる者。獨や佛や果して如何にして此制度を採用せる。獨が二年制に改めたるは四圍の狀況の然らしめし所。陸軍の兵員を増加せんとしたるは其原因。佛は自由平等を叫ぶ國也。不公平なる免役雜役を廢するを目的としたるのみ。然るに我論者は孰れによりてか然かする。獨によれるか。さらば我兵數は余りに多し。佛に倣ひ、自由平等の觀念より國民の課税を公平にせ

んとてか。兵役を二年とし如何程自由平等なる。好成绩なる三年兵役を廢せんとは論據極めて薄弱なりと叫び、語を續けて曰く、諸君は獨に倣ひしか佛によれるか。無意義なり無意味也。嗚呼諸君は獨と佛とにかふれたり云ひ、更に、二年制によりて減じ得たる壯丁が社會に盡すことを得るは、單に經濟上より云へば之に賛するを得れど、訓練を度外視せるは不可なり。二年制は軍隊訓練の單位なる中隊組織を打碎す。且銃器は月に日に精巧、而して兵役は僅かに二年、その成績は知る可きのみと云ひ、故兵と新兵との關係を詳述し、到底適當なる訓練の望まれ難きを説きて降壇せり。次に

惠利君起ちて曰く、福富君の辨駁は毫も痛傷を感せず。獨佛の如きそが好制度ならんには宜しく之に則る可し。君は積極論者を好奇心に驅られたりとなせり。余はうの好奇心なる者を好む。敢て問ふ。三年制ならば果して自由平等たるを得るかと云ひ、抑吾人は今三面より論せんとす。經濟上より二年制の不可ならざる事これ其一

。一年の短縮によりて社會の受く可き利益の太なる事これ其二。訓練は年限の長短によらず。二年なりとも其實績を擧ぐるに難からざる事これ其三。以上の三面よりせばやがて此問題は解決さる可しとなし、余論として其軍隊觀(?)なるものを述べ可しとて、軍隊は國民の一大打擊也。青春有爲の時を三年の間兵營に送るは、人物經濟の上より見ても不可なりとし、平時にありてはかの消火器をも水撒とせよ。かの軍艦を商船とし、軍隊をして社會に接近せしめよと云ひ、軍隊に於て試験制度を採用し、規定の實力あらば兵役は一ヶ月にても、一日にても可なりと述べ、語を次いで曰く、二年制は實に余が理想に近きものなり。されど直に二年制を以て、かの軍備縮少と混する勿れと云ひ壇を下る。

江崎君徐ろに口を開きて曰く、反對論者の唱ふる所は理屈上の議論のみ。余は今この欠点を指摘せんとて、我國にては普通教育未だ普及せず。軍隊にて其一部を補ふものなるに、之を二年制となさば其効果如何。精神教育は之を現時の

學校社會に望む能はず。而して軍隊にてはこれに最も重きを置き、三年尙不足を訴ふるに二年に減少すれば果して如何。且二年制にては訓練の不十分なるを難じ、兵役年限短少なれば、從て多くの下士を要し、下士多ければ從て俸給老養金等過多を要し、又二年制にては豫後備兵の訓練、演習等頻繁にして多額の費用を要す。更に中隊編制に欠点あるを述べ、進んで反對黨の二大理想を駁せん。とて、論者は一年七十萬圓を減じ得るといへど、之より前述の種々の費用を減じ去れば、剩す所幾何かある。又課税の節減を云々すれど、これ亦一顧に値せず。且論者は獨逸に則る者ならんも、二年制を採れるは歩兵のみにて、多くの訓練を要する砲騎兵等にては皆三年。獨逸にして尙且然り。教育の點に於て一籌を輸せる我國に於ては、到底不可能の事に屬す。今や東亞の風雲益々非。反對論者はこれ亡國の音を吐くもの也と呼びて降壇。次で山室君顯はれ、一睨して曰く、反對派こそ却て亡國の音を吐く者なり。好果ある制度を知りて

行はざるは無學也。愛國心なきなり。獨佛に倣ふは帝國臣民に非ずと叫絶し、江崎君は普通教育を云々すれども徴兵令發布の當時よりは、我國教育は一大進歩をなせり。これをしも不足なりと云ふ。これ同胞を侮蔑せるなり。今日目に一丁字なきものはあらじ。況や單純なる軍隊に於てはただオイチニを繰返すのみ。又体育上に就き云々すれど今日の戰闘は相撲に非ず。氣概あれば可なりと云ひ、次に精神教育の如何、下士制度、演習費、負擔の節減等につきて駁し、最後に、今日は決して東亞の形勢日に非なる者にあらず。至て平和なり。軍隊を要する期ありども、二年制によりて得たる現役十萬の兵あれば可なりと説きて壇を去る。次で出でたるを木下君となす。反對論者は自己の本領を言明する能はすと雖、稍とる可きものを求めて二を得たりとて、先づ教育に關して難じて曰く、獨逸は二年制をとりて好果を收めたるも、彼と我とは關係を齊しくせず。特に教育普及の點に於て、我國にては百中二十は無教育者也。彼にありて

は百中九十九の壯丁は皆文字を解す。然も我軍隊中教育ある者とても僅かに尋常小學卒業位の程度のみ。次に經濟上の關係につき駁し、二年制は或は利する所あらん。されど之によりて其戰鬪力は著しく殺滅さるものなり。吾人は經濟的利益あるとも、容易に賛する能はず。試に思へ、自今我軍隊が奮闘すべき地は、必ずや亞細亞大陸ならん。吾人は多さを望まず。たゞ少數の精銳なる軍隊を送らんとす。然るに二年制によりて養成されたる軍隊の戰鬪力はいかに。吾人は兵役を三年の儘にせんことを望むものなりとて壇を下る。

松山講師ははや壇上に立てり。我日本は今や貧血性に罹れりと喝破して曰く、國家は一の有機体なり。既に有機体なり。さらば骨骼なかる可からず。骨骼を包むに筋肉なかる可からず。筋肉を活動せしめんには血液なかる可からず。筋肉は實に骨骼より構成されたる体軀の衣服ならずや。余が所謂國家の骨骼とは、憲法なり民法なり商法也。血液とは國家の富なり經濟也。衣

服とは陸海軍の謂也。我國に於ては既に憲法を發布して、逞しき骨骼はなれり。太服は如何に。日清戰爭後一大飛躍一大擴張をなせり。さらば血液は如何に。果して充實せるか。國家の經濟は今如何なる狀態なるか。あゝ我日本は今や血液の不足を感じるなり。故に吾人は貧血性に罹れるものなりと斷せり。何が故に然るか。何が故に經濟界はしかく不振なりや。これ從來國家の制度が、形式的に國家を發達せしめたるに依るものならん。現時は尙可なり。されど向後我日本は一大英斷を下し、經濟政策をとりて、大に血液を富まさる可からず。國家が破産するに至らば、軍隊ありとも亦何にかせん。さらば其方針は如何に。財政上より云はゞ軍事費は消極的のものなり。故に先づその經費を去りて、之を積極的事業に投せよ。然れども直に軍備を縮少せよとは云はず。何となれば我國は日英同盟によりて、無形の兵力を得たれど、平和の破烈豫め期す可からず。されば十三個師團を減じて九となすは、輕くに論する可からざればな

り。然らば軍備を今日の儘とし、經費を節減せんには、如何にして可ならんか。これ即兵役を二年とするにあり。先づ其利を云はん。一、之によりて減じ得たる經費を、教育鐵道あらゆる事業に用ひ、以て國民の負擔を輕減するにあり。二、之によりて得たる五万の壯丁をして、生産的事業に盡さしむるにあり。かくて國家は有形無形の利益を受け、一面その兵力を減せず、他面に於て國民の生産力を増進し、以て軍備と經濟と、兩々調和せしむ可し。これ策の得たるものに非ずやと述べ、次に反對説を駁して曰く、論者は云ふ、二年制をとれば軍事教育上不都合を來し、兵の精銳を損すと。されど思へ、今と古とは其間に非常なる逕庭ありて、二年と三年と相匹敵すべし。普通教育不十分ならば、宜しく教育の方面に經費を増加すべき也。其他別に駁する價值なし。今や新に日英同盟締結され、東洋には暫く事なけん。須く此機を利用して、二年兵役を採用す可しと結びて降壇。

二、官教授最後に登壇して曰く、要するに反對論

者は實利主義、社會主義に感化されたる爲らなり。論者は兵役を二年となせば、現今の軍備を保存し經濟上との調和を得可しとなせど、數字上の差等は、決して其實質の如何を説明するものに非ず。畢竟これ我田引水の論のみ。論者は亦兵の執務は單調にして、三年同じき事を繰返すに過ぎずとなす。されど、銃の操法、兵器の使用、これ技術上のものに非ず。硝煙彈雨の裡、敵を見て自若たるは、習、性にあらざれば能はざるなり。論者は更に兵は不生産的なりと云へり。治に居て亂を忘るざるは軍國の事なり。敵の來襲は測り難し。その治に居るを見て、直に不生産的なりとなすは、これ眼前の利なきを見て推斷せるなりとて二三の説を駁し、而して曰く、國家の兵制は軍備上より云はゞ五年可なり、十年尙可なり。されどこれは到底民力の許さざる所にして、經濟上亦不可なるは論を俟たず。論者は戰時人員を其儘とし、平時年限を減じ、以て豫備兵を増加すといへど、これ軍隊の活動を殺減するもの。且近時兵器精巧を極められば、勝

いた。七時半の開會に出席者が少かつたので、時間多分延びたとて、小野幹事は立つて開會の辭を其希望とを併せ述べた。

今夜のは討論會で、問題は日露開戦の可否であつた。

最初に立つたのは積極論者の佐々木君。君は一我日本は東洋の盟主なれば苟も東洋の安危休戚に關する事あらば此東洋の爲に十分の事をなさざる可らず。二、支那の現状よりして。三、朝鮮の現状よりして。四、露國の東方計策に對抗する必要上よりして。五、戦争の結果は我に勝算應たればとの理由で、日露開戦の避くべからざる事を論じた。論旨整然、言語明晰で、態度も調つて居た。

次で消極の側に立つたのは、内藤君であつた。君も敵に對抗する積でもあつたらう、五の理由ありと云はれたのが、只四つしか擧げられなかつたのは、如何にも粗漏ではあるまいか。一には日本の現状よりしてとの前提を置いて、國庫の空乏と國民の困弊とを説き、二には支那の現

狀よりしてとて、分割問題は各國の揚言する者なれども權力平均の關係より、とても行はるべきでないと述べた時には、隨分論旨怪しくなつたが、三に朝鮮の現状よりしてとて、七年征韓論當時と相對照して、積極論者の我國情を察せず、只外征のみを論じたのは、偏見であると云つた時には、流石の敵の陣立も崩れるめた様であつた。四に露國の帝國主義は、只不毛の地を開拓するので、他意がないから、此際風聲鶴唳の痴態を演じてはいけなないと結んだ。論理は整然とは云へないが、敵陣の一角を破碎するの点に於ては、確かに前者よりも一步長じて居た様であつた。

次であらばれたのは、本問題提出者福富君である。先づ大喝して曰く、日露の開戦は避くべからざる日本の運命であらう。恰もローマとカルターゴとの夫の如きであらう。次で日露交渉の最近の例を引て之を證し、且つ我國の陸軍の數が、歐洲陸軍國の數に比して遜色がないのは、之を滿州の野に戦はしめん爲ならせして何ぞと

當局者の意を付度し、開戦の機は露國海軍擴張の老年計畫が完成せざる前、日英同盟の解除以前、即今日を措ては外にないと論じた。如何にも見事の陣立であるが、然し余りに正々堂々である。正兵を以て正面よりする敵には或は當るかもしれぬ。奇兵を放つて後を窺ふ敵があつたら、其旌旗は直に伏すべきものであらう。次で現はれた消極の本田君は、いで敵の虚に乗じて、惱ましてやらうとの意氣込凄じく軍には或は勝てやう。しかし其の獲物を他に取られ、名をのみ得やうとするのは、反對論者の愚ではあるまいかと、一の矢は確かに敵の内兜を射た。併し二の矢をつがずに語を轉じて、敵に餘力を聚むる暇を與へたのは不可。この學察の兎狩を借り來つて、日本人は繩張に巧で、獲物を得るは拙ないと、斷言したあたり、痛切の様だが未だ至らざる事が遠い。

次で立出でたのは、和氣君である。大聲疾呼して曰く、戦をなすには、先づ内を顧ることが秘訣であらう。日露開戦の機は今日であると云

ふ論者の如きは、日英同盟を頼んで戦はんとするものである。抑該同盟は、戦をなす爲に結んだのではなく、商業上の必要からなしたのである。又其が果して頼むに足るものであらうか。然も我は、今日獨力を以て露に當る事が出来やうか。乞ふ我國情を見よ。財政の紊亂は如何。國庫の空乏は如何と。確かに敵の牙營を突いたが、結末心機一轉(？)、我もまた彼をうつべき理と決心と、其の衝突の避く可からざる運命とを有することを知つてゐる。しかし今日は其の時でないど結んだのは、直ちに敵に我を刺すべき武器を供したもので、君は已の武器を以て已の味方を傷けたのである。

消極論者の陣は今、其一角を破潰し去られた。否已が刀を以て。已が陣を突き碎した。積極論者の一人浦本君はたつた。曰く古來我國は武を以て優り、商に於て劣つたと、幾多の例證を引用し、次で露の外交術の巧妙なる、到底我外交官の敵でない。故に我は我武を以て、露の巧譎なる外交を屈服せしめやうと結んだ。併し惜い

説、敵軍は何等の痛傷をも感じなつた。

それで消極の方よりは、高村君が出て、福富君の説を二三駁して、滿州の事情は未だ日露開戦の動機となる迄には熟してゐないと説き、次で日英同盟は頼むに足らない。既に頼むに足らないとすれば、結局如何なる勝算があるか。我をして云はしめよ、滿州にては或は二三の勝利を得やう。しかも西比利亞の野に於て、彼の精銳なるコサツク兵と、不知案内の地に戦ふ暖國の我兵は如何であらう。且我國財政の現状は如何。たとへ戦に勝つても、其實は亡國を見るに至らうと結んだ。論理は明晰であつたが、之れ退いて我を守るのみ。進んで敵を突いたのでない。消極派は、茲に再び君に依つて、攻撃的態度から、守備的態度に變じたのである。此機を逸せず、積極派の惠利君は現はれた。君は先づ毒舌を弄して敵を翻弄し、且つ皮肉にも和氣君の失敗に乗じて追窮した。而して、君は曰く、日露開戦は避く可らざるものであらうか。避くべからずとすれば、今日は其時であらうか。此問題

の決する時は、やがて敵の首が落さるゝ時であると云つて甲東の言を借りて、我國は初め十年間に準備中十年間に設備を終つて、三十年に至つて東洋的飛躍をなした。四十年は、正に世界的飛躍をなすべき時ではないかと斷定したには、少々怪し推論で、之では敵の首も落ちさうでなかつた。最後に、反對論者の内を顧みよと云ふのを駁して、日清戦争當時の國情を述べ今日の紊亂せる内政は、日露戦争に依つて整理する事が出来やう、と云つたのは、時間が足らなかつた故であらう、最後に議長と唾んで立つたのが、江崎君であつた。例の調子で、露國が朝鮮に構へた事件の、表面よりも裏面を見よ。且つ我國の内情を顧みて、輕々にも會稽の耻を雪ぐと云つてはならぬ。露國外交の慣用手段を知らないか。朝鮮問題は、我視線を之に引いて、滿州の經營を安全にせんとするもので、吾人は朝鮮で露國に勝つのは、滿州で彼に負る所以であることを知らなければならぬと、やつたのは、壯快であつたが、結尾に至つて、諸君／＼が余

り多くて、聞き苦しかつた。君が壇を降るや、議長は討論を終結して決を採つたが、同數であつた。次で例の茶話會に移りて、散會したのは十一時であつた。
(みどり投)

○寒 稽 古

殘月金峰山に落ちて、寒風膚を襲ふ時、わが龍南の健兒は、武を道場に練ると三週日、龍驤虎躍の活劇を演じて、滿腔の英氣を披瀝したりき。今皆勤者の姓名を掲ぐれば左の如し。

擊 劍 部

師範 梅崎彌一郎
助手 中嶋 正直

本 數

本 數

一六六	二級甲	池田 隆徳	一八一	二級乙	川井田 藤助
一四六	全	黒田 孫一	一三一	全	宮山 平五郎
一二九	三級甲	篠原 禮介	一一二	全	加藤 勝平
八八	全	石丸 小一	一三一	全	林 進士
一〇四	全	萩野 安藏	一〇六	全	福山 隆吉
七六	三級乙	藤澤 幹二	八八	全	戸次 宋喜
七五	全	磯 梯三郎	四四	全	佐々木茂枝
九五	全	小泉 勝喜	八二	全	隆山 三郎

六七	四級甲	田上 嘉藏	七四	全	長尾 正保
五五	全	石野 斐夫	六〇	全	豊田 利盛
五三	全	平井 三男	五二	全	稻葉 實
四五	四級乙	田口 環	五〇	全	大井 繁造
四四	全	藤岡 本三郎	六三	全	品 川 章
五九	全	後藤 朝太郎	五〇	全	野村 喜平次
一〇八	全	松本 一村	八五	全	間庭 秀夫
四六	全	渡邊 元吉	四二	全	福岡 健策
六三	全	小穴 宗次	四二	五級甲	高 橋 保
四八	全	花田 大五郎	四三	全	江崎 規矩
七五	全	松本 米藏	七四	全	城 慈 雲
三八	全	廣 田 勤	四一	全	豊島 要三郎
五五	全	松井 小三郎	六三	全	中地 東一
四六	全	本田 英作	五四	全	長松 宗一
七五	全	神保 孝太郎	五〇	全	廣田 耕作
四二	全	酒井 和太郎	六七	全	大植 見龍
五七	全	高田 保馬	四九	全	藤谷 彌三郎
八五	全	森 音 藏			

三年間寒稽古皆勤者

藤澤 幹二 戸次 宋喜 長尾 正保 後藤 朝太郎

進級者左の如し

宋次 精一 空閑 茂 有田 秀介 川井田 藤助 黒田 孫一
右二級甲へ

加藤勝平 石丸小一 林進士 福山隆吉

右二級乙

藤澤幹二 戸次未喜 磯梯三郎 佐々木茂枝 小泉勝喜

蔭山三郎

右三級甲

田上嘉藏 長尾正保 石野斐夫 平井三男 稻葉實

右三級乙

田口 環 大井繁造 藤岡本三郎 品川 章 後藤朝太郎

野村喜平次 松本一材 間庭 秀夫 渡邊元吉 福岡 健策

小穴 宗次

右四級甲

花田大五郎 江崎 規矩 森 音 藏 松本 米藏

高橋 保 城 慈 雲 廣 田 勳 豐島要三郎

松井小三郎 中地 東一 本田 英作 長松 宗一

神保孝太郎 廣田 耕作 酒井和太郎 大植 見龍

高田 保馬 藤谷彌三郎

右四級乙

柔道部

皆勤者並に本數左の如し。

百三十三 丸田 富近 二百十三 原 正義

九十四 今永徹二郎 百三十三 石 原 勝

百十四 惠 利 武 六十七 藤 野 幹

百三十四 松居甚一郎 六十六 東 野 稔

八十六

百七十九 鈴木 安一 七十二 八尋 生男

百四十九 石河兄三郎 七十三 後藤 澄心

九十五 永松幾五郎 六十 松本 孝二

百〇九 佐 藤 適 百 中川 直惠

百五十四 森 毓 六十一 西川 利行

百〇七 松隈 匡輔 六十六 田所喜久馬

百二十 大神熊二郎 四十九 益富 貢三

九十三 田原 純一 百〇二 鷺尾勘解由

百四十三 佐々木良綱 四十四 釘本 昌光

八十一 水塚三四郎 四十六 吉永 常吉

六十九 佐藤 貞藏 五十九 吉河 秀雄

六十八 青木 利光 六十一 小畑 惟清

七十五 黒川 芳雄 六十一 猪口 豐喜

九十三 花田大五郎 五十一 山口 乾輔

七十九 中村 崎造 八十七 東恩納寛淳

三十三 西田 得一 五十九 金丸 喜一

五十三 柴田 直道 六十四 後藤朝太郎

五十八 寺田 規一 四十九 江 副 巽

七十一 淺見伊勢松 四十 横田 文吉

六十五 小田 脩 五十一 嶋田 比樂

百〇九 大日方 俊 四十八 古屋 貞藏

三十三 中津 親義 四十六 築地 宣雄

四十三 小穴 宗次 四十一 西依 六八

西十三 成瀬達

六十七 飯島庸徳

五十 西郷健雄

四十六 三根繁太

五十 山田仁市

三十一 加藤義夫

四十五 小山倉之助

四十八 横田文吉

三年間皆勤者左の如し。

花田大五郎

進級者左の如し。

中光良太 丸田富近

右二級甲へ

今永徹次郎

矢野漸

城隆之助

惠利武

右二級乙へ

石河兒三郎

永松幾五郎

右三級甲へ

佐藤適

森 誠

萩尾管二郎

赤木 歌吉

岳野 忠一

松隈 匡輔

大神熊二郎

田原 純一

佐々木良綱

佐藤 貞藏

右三級乙へ

青木利光

花田大五郎

中村崎造

大島春海 柴田直道

右四級甲へ

六十七 藤尾 勝馬

四十一 水口 出世

五十一 大塚 熊一

七十二 福田 政喜

三十五 多久愛次郎

三十六 寺澤 子有

四十一 猪 股 勳

三十九 岡田 穆

寺岡 規一

東野 稔

松本 孝二

益富 貞三

吉川 秀雄

成松 明信

右四級乙へ

山口 乾輔

馬場 堅一

右五級甲へ

小田 脩

成瀬 達

山田 仁市

横田 貫二

水口 出世

右五級乙へ

猪 股 勳

弘岡 道明

八尋 生男

中川 直恵

鷺尾勘解由

小畑 惟清

築地 宣雄

東恩納寛淳

兒 玉 高

江 副 巽

後藤朝太郎

淺見伊勢松

大日方 俊

飯島 庸徳

加藤 義夫

島田 比樂

大塚 熊一

岡田 穆

原 正義

福富卯一郎

西川 利行

釘本 昌光

猪口 豐喜

福田 政喜

金丸 喜一

後藤朝太郎

淺見伊勢松

中津 親義

西郷 健雄

小山倉之助

古屋 貞藏

多久愛次郎

寺澤 子有

藤野 尊

後藤 澄心

田所喜久馬

吉永 常吉

齊藤 宗績

藤川 勝馬

小穴 宗次

三根 繁太

横田 文吉

西依 六八

寺澤 子有

○意氣銷沈録

誰ですか、意氣銷沈録なんて縁起でもない。

誰でもないが斯く申すのは、去年の六月名譽ある卒業証書を手にして、上熊本停車場を發し、而

もて今塵の都に、高慢チキな形をして居る角帽を嫌々ながら戴いて居る一人である。斯く云へばとて、ミルトンは學校が嫌であつたの、バイロンも同じくで、シエレーは放校されたなど、敢て主張するやうな、大それた考を持ても居ない。序に言て置くが、意氣銷沈録といへば、既に小生の前身は、意氣軒昂とか、昂揚とかいふ可きものであつたことは自ら明白である。

龍山白水の間といふ、すばらしい名所ぞみた山の奥から上落し給ふて、木曾冠者の轍を踏んだ者は聞いた。高木先生の所謂『三寸の頸に、三寸五分のカラー』に、宗旨變をした人も聞いた。はた都大路を、エンバチスの羽風すさまじく、シヤシヤ張り歩き給ふ人も聞いた。龍南の意氣銷沈君が、都の意氣軒昂君となつたのも聞いた。然し、龍南の軒昂君が、都の銷沈君になつたのは初めてだ。

イヤ事をやるなら若いうちだ。私共のやうに年をとつてからは、何をやつてもカラ駄目だ。

私も諸君のやうに若かつた時は、龍南の天地を

意張つて歩いた。思ひ出して身の内が少く／＼して心が若々やうだ。其時は……聞かれると、少々困るが、まあ織梅だ。言つてしまはう。

金峯の山の端に、鎌のやな弦月が懸つて、中天には薄暗い雪雲が飛んで居る冬の夕暮に、觸れなば溶けんといふ雲が少しばかり降つてゐるのを、外套の頭巾に避けながら、徳利片手に畦路づたなど、シヤレたとも度々たつたが、然し風流は寒いもの、其時必々思ひあつた。それから歸てからが何時も面白い。エーと明日は英語漢文、獨逸、歴史、國語か、困たな。ヨシッ休むにきめた。青春再び來らずかといふ調子で、火桶に火が燃ゆだす。ソロ／＼罪もない机が、拳骨を喰はされる。天下の英雄が罵られて、後に瞳若と回みだす。學校の規則が、一本まゐられる。教授の意氣地無しを痛罵する。はては文壇の不振を慷慨する。殺氣は、六疊の室に満ち溢れる。ザット大略がコーデ、それから徳利が横に見る時は、夫子其自身も横になつて居る。シヤなれ

ば天下も至極泰平な者で。両政理整も地租繼續も、解散も何もあつたものではない。思ひ出して可笑しいのは、エラクなるといふことが、人生である様に思つて居たことで、だから高等官何等位に安じて居る、ソシデヨソコラの方々を見ては、馬鹿に哀れつぱくなつて、可哀さうな者だと云つて吊つて居た。功名心の盛んな者から見れば、何等の大計畫、大野心もなくしての教官位は、憐む可き者であらう。然し彼等といふと失敬だが、兎に角安んじて居るのは高等官何等でなくて、別に大に存するありだらうと思ふ。それぢや那邊に存せりや……那邊だなんて六ヶ敷云はんでも解つてゐる。家庭といふ者だ。諸君のやうにお若い方は、向上心の乏しい人を見れば、直に雪隠の中で、首でも縊てしまへなぞと、大それた暴言を吐くから困る。拙等も、昔はソシナとを言て居たが、此頃は却て名譽を追求する人の、氣が知れなくなつた。向鉢巻で研究だなんて言つた處が、五丁、占よ、矢張五百石積だ。興が湧けば詩も讀ま。

が胸に溢るれば、歌うも悪くはなからう。泣きたくば哀詩をつくるもよからう。エラクなるのもよからうが、今少し人生の味な方面を考へるのも、面白いではないか。拙等此頃野心なんて者は毛頭ない。人間は、大に大俗になりすまして、浮世の榮を一身にかきあつめる大望も、有つて悪くはないが、美人の手を携へて、深山に入る底の大仙めいたふしも、有つてよからうと思ふ。何を苦しんで塵の巷に煩悶する必要がある。誰でも若い中は、蜃氣樓のやうな空想を懷いて、エラクならうと思ふ。諸君でも中學を卒業する。高等學校の入學試験には見事に及第する。雜誌部の記者が『新入生を迎ふるの辭』で天下の秀才だなんて煽る。急にエラクなつた氣がする。その中に角帽を戴く、角帽を脱ぐといふ調子で、ハヤ鼻の下の心配をする二三年。新世帯の味も解つてくる。浮世は面白くないやうで案外面白いものだなんかと云ひだす中に、初子の初聲を聞く。そんな古い思想を抱いて居ちやと、子供から一本まいられるやうになる。

その時はじめて禿頭を撫で、オヤこれの野心は何處で落してしまつたらうと、提灯かざして夜の途を辿るやうに、落した野心を探すべく、生涯を追想して見ると、初子の辻に落ちて居た跡があるから、イヤも少し前だらうと跡をつけて見ると、果然新婚の夜に落した形跡がある。成程あの時と、老の繰言を云つて居るとゾドンと踏みはづして、深い／＼奈落の底へ落ちて行く。

皆か皆までコ―でもあるまいが、試に墓原へ行て其墓の寸法を測量して見ても、多くが平凡で死んだとが知れるじやないか。然し諸君のやうなお若い方は、皆々名を竹帛に垂るゝ位は行かなくつても、名を新聞に掲る位の大望は持てゐられる。イヤどんなに隠したつて駄目だ。私等から見れば能くわかります。先づ法科の人なら、太郎君、權兵衛君、荒助君、チヨイトそのき給へ。國家の經倫三寸の胸に藏して在り矣なぞ、獨逸の試験の時にはペン持つ手が慄ふやうな瘦腕で、國家の經倫をやらかさうと仰せ

られる。すさまじいもので。文科の人ならば、イヤ紅露兩君嫌なら止し給へ。何もソソナニにグヅ／＼せんでものとちや。貫一だつて、宮さんたつて、小説が完結しない中に歳が六十にも七十にもなつて、死んで仕舞うよ。ハテせつかな批評家諸君、天才無きを歎ずる勿れだ。茲に乃公のあるあり、以て明治の文壇を飾るに足ると、熱氣を吹きかける。これはたすまじき極だ。と云て諸君を凡才だなぞと云ふ考は夢更な

いが、こんな人もあるといふとさ。若い時は希望を自己の上に置き、老いては他人の上に之を置くのが普通であらう。道理だ。誰でも始から巡查で一生を暮さうなんて思はないからな。皆其相當にエラクなる目算だけは立派にあるのさ。チヨイトそこらを見まはしてもわかるだらう。腰は弓張提灯の破れたのを轆にかけて居る辻侍の老車夫も、あれで一生暮さうとは思つて居なかつたらう。

拙者も若い時には随分と思ひ切つた大望野心を起したこともある。それでも一時は大詩人だと

か、大文學者になる、イヤ必然ならねばならぬなぞ、自惚れて居たのだ。だがね難有いことには名譽てのは果して如何なるもので如何なる價值を有して居るかといふ問題に、想到す可く餘義なくせしめた一事件が、僕の一身に起つた。また何の爲に生きて居るかといふ問題を、考ふる可く餘義なくせしめた一事件が起つた。拙者は大に考へた。考へて大に驚いた。ね耻しいが拙は其時迄只一に名譽の爲めに生きて居たのだ。然し此大悟徹底する(大袈裟だが)瞬間迄に人が若し貴様何の爲めに生きて居るかと問うたら、屹度社會の爲めだとか、人類の爲めだとか、口幅つたいことを言つたらう。イヤ言つた許でなく實際さう考へて居たのであるが、今になつて見ると、要するに其時迄は惟く名譽のために生きて居たんだ。面白かつた、無邪氣だつた、世の中の人々が皆馬鹿で自分獨りがエライのさ。世の中に此位愉快なことはなからう。人生其ものを黃粱一炊の夢なぞと云ふ比例から考へて見れば、此等の青春の夢は何と譬へたらよからう。

あゝ拙も滅切年をとりました。老いては意氣の銷沈するものも無理はないと、少しはた察し下さい。

この通りに此頃は變に悟を開いて、名譽なんでものはネツカラ欲しくもないので、隨て野心なぞは毛頭御坐なく候といふ調子だ。だから、勉強が出来ぬと云て泣面をかいいたともなけりや、文が出来ぬと云て向鉢巻したともない。それで元來の吞氣生か益々吞氣になる……

大學の話！大學の話といつた所で、別にないから、大學一覽で見て下さい。なほ詳しくは當地へ來てから親しく見ると能く解るであらう。何も今から騒ぎたてんでも、勉強さへして置けば大した間違はない筈です。

同年卒業生の様子……年をとると交際も次第に少なくなるから、詳しくは知らないが皆よく勉強してゐるやうだ。然し文科から法科への轉科生の多いのには驚いた。獨逸文科さんが桂君獨り踏み止つた。兎に角文藝の趣味のないがりが君なんぞ文科へ始から來ない方が其人の爲め

だ。ヤレ獨逸文科は落第が多いから止すの、文科を卒業しても中學教員で一生を埋ねばあらぬなど、氣にするやうな人は到底頭から文科向きに出来て居ない。一生中學教員で暮し、また落第の五六回はいとひませぬといふ元氣なけりや駄目だ。人前で演説かしたくば、救世軍へ入り給へ。コスメチックをつけて二頭立の馬車に乗り度くば、別當になり給へ。俗惡なる趣味を有する社會から歡迎され度くば、幫間になり給へ。何も高い授業料を拂つて法科へ入るにも及ばぬ。文科へは無論のことだ。

イヤ手前勝手なとばかり喋りました。少し龍南の様子がきつたいものだ。大演習の時は大騒ぎだつたとか。それに就て、言いたいともあるが、何を云ても女難の相は無くとも、筆難の相は有さうな拙者のとだから止さう。ストーブの周圍には相變らず話に花が咲くだらう。あゝなせあんなに無邪氣で愉快だつたか。思ひ出しても何だか胸が壓せられるやうだ。習學寮の火鉢の縁も面白いだらう。時に酒はどうです。奥

舎監が新學年に大に望を囁じて居られたから、さぞ甘く行つてゐたらう。(拙者當地へ來りてより未だ一度も酒を飲まず、此頃は酒のつきあひも五月繩い位だ)紅葉山の麓の太木が二本折れたとか。紅葉山といふと何だか故人に遇つた感じがする。夕方に西へ沈んで行く明星の影を望みながら、星見が岡と名づけたら面白からうなんて言つたこともあつた。櫻時分にあの下を花時雨を浴びながら學校へ通つた。それから新緑の景色、なほいはれずだ。龍田山のさびしい小路も屢々夢路に通ふ。あゝ思ひだすと何だか悲しくなつた。一生に一度は、そのかみのやうな無邪氣な心になつて、再び龍田山の小路を辿り、夕闇を紅葉山にイミたいものだ。然し駄目だ。同じ肉躰が、同じ場所を辿り、同じ丘にイミむことが、よし出来るにしても、心はもとの無邪氣な心ではない。あゝ時は再び歸らぬものであらうか。人生は再び經驗することの出来ぬものであらうか。

話が老の繰言に落ちて、面白くない。雜誌部

の委員から何かといふことであつたから、老いさらばひし腕を揮ふて、一息にこれだけ言いたものゝ、實につまらない。

終に大々的傳言がある。それは文科への謀反者の國務大臣なる鴛海純三君からの傳言である。

龍南の大沙説家——未來の代議士——未來の國務大臣なる鴛海純三君からの傳言である。ツブレにしても二十貫もあらうと云ふ大体を搖りながら氏の曰く「法科大學の教授は皆コンモンセンスなしと、序に熊本へ云つてやつて呉れ給へ」と。但し常識以上の人ならざる氏の言であるから、此批評の正否は小生の與り知る所でない。

末筆ながら、諸教授、諸生徒諸君の幸福と、健康とを祈る。

一月十一日

右の一篇は、前號に掲ぐる筈なりしも、編輯上の都合により、遂に遅延して、本號に載すゆに至れり。×××生、之を諒せられ。

○殘虹一家言

○學寮會を公開す可し

寮生規約第二條に曰く、寮生の機關として學寮會を設くと。その第三條に學寮會は各室長各炊事委員長及び雜誌部委員一名を以て組織すと。何等矛盾の甚しきや。既に寮生の機關として設置せられたる學寮會は、全寮生の八分の一許りなる僅々の人員を以て占められ、剩つさへるの會議に於て決議せる案件に對しては、可否如何に關せず、全寮生は盲従の義務ありといふに至りては、僅少なる室長等を除きては、他の寮生は有する權利を蹂躪され、その自由は束縛されたるものと云ふも不可なきにあらずや。堂々たる帝國議會だになほ庶民の傍聽を許せるにあらずや。然るに寮生唯一の行政立法の機關なる學寮會は、常に秘密會議の如き觀を呈せり、勿論寮生の不利となるべき事件は、我親愛なる先輩室長諸君が決して可決すべき理由なかるべきも、尙ほ吾人は聊か疑懼に堪へざるものあるなり。うは他にあらず、近來寮生間に喧傳せらるる舍監專制の聲なり。吾人は此聲を聞きて竊に怪めり、室長諸君は何の爲めに學寮會に參列す

るや、而して如何なる案件を議するや、若し寮生の不利を招ぐべき案件提出せられたる場合に於て、室長諸君は果して侃諤の辨を以て、その撤回を要求するの勇氣ありやと。これ甚だ室長諸君を侮蔑したる言ならん。然れども吾人はこれ當然起るべき疑問なりと信ず。若し諸君幸に尸位素餐の誹を免るゝ可き行動ありとせば、吾人の喜ぶ若かんや。前言の如く室長諸君は僅少の人員を以て、吾人寮生全体の權利を獲得せるもの、若し寮生の不利を顧みず、徒に盲從屈服を以て己が能事終れりとなすが如きことあらば、是れ寮生を侮辱するの甚しきものにして、かゝる盲從的決議案を採用して、學寮に施行する舎監も亦タイラントの誹を免る能はざるなり。元來我學寮會なるものは、寮生の輿論によりて寮政を行はんが爲めに設けられたるものなり、而して各室の代表者として寮務に熟せる室長を選みしは、理の當然なるべきも、寮生に對して、其會議の傍聴をも許さざるに至りては、寮生の機關たるの實何處に在りや、吾人ば切に希望す、

寮生に發言權を與へざるまでも、學寮會を全然公開して寮生一般の傍聴を許されんことを。且や近來舎監制度に倦厭の念を生じ、自治制度を叫ぶの聲漸く大ならんとするの秋、宜しく寮生の輿論に問ひ、以て事を處せば、吾人の意や、満足せんか。

○室員の混合配置

去る三十四年九月、我習學寮には一大改革行はれ、舊時の尢然たる大自習室は兩分され、一部二部等各部割據の有様となり、舊生徒は室長の外總て新寮に祭り込まれたりき。當時與舎監の意見は、室も狭く人員も少なく小奇麗なる室になりたれば、比較的勉強には都合よからん、又新舊生隔離及び部分の如きはるの利を確信せざるも、或は利ありて害の鮮からむを豫想して經驗的に決行し以て從來の退寮者の多きを減せんとし、又禁酒の宣誓をなせるものと、然らざる者とを區別して、飲酒の誘惑を避けんとするにありき。かくして時日を経過する既に二年に垂んとす、而して此間に於ける成績は果して舎監

の豫期に符合せしや否やは問はず。余は少しく所思を述べんと欲す。第一各部(工學部を除く)割據の姿なるを以て、南寮と云へば二部を連想し、北寮は一部及三部の代名詞の如く、従つて部的感情は漸く強く、甲部生は乙部生を嘲り、乙は甲を罵り、部を異にすれば從來の知己の外、此を視ること恰も行路の人に似たり。此に伴ふて起る所の弊實亦尠なからず。各人の趣味は偏狭となり。交際は一小部に限られ、見聞の以て智を廣むるなく、到底牛は牛連たるを免れず。勿同部同級生が同室に在れば、下調べの際の如き幾分の利便を得べきも、夥多の效果の望む可からざるは、吾人の經驗に徴して明かなり。其交際の如きも級を同うする者は勿論、部を同うする者は。教室其他に於て相識るの機少なからず、何ぞ此を學寮に於て強て求むるの要あらんや。第二に新舊生徒を分離するは、禁酒令の勵行につきては、或は些少の效果は收め得られしならんも、是れ亦部分けの如く、一年生に對する二年生、此に對する彼の間には、一の判然

たる區劃を生じ、郷里若しくは出身學校を隔てるものゝ外、相互に半面の識だも得る能はず、累は引て學校全体に及ぼし、終に一致を行動をなす能はざるに至るべし。かくして不知不識の間に、此大なる家族は互に相擠排するの念を生じ、終には全く一の天下宿屋と化し去らんとす。是れ果して如何にせば可ならんか。余は希望す、來るべき學年よりは工學部を除計る他の生徒は、出來得る限り入れ違へ、孰れの部たるを問はず混淆し、尙餘地あらば、交ゆるに室長以外の舊生徒を以てし、新寮舊寮の別なく此を配置されんことを。かくせば寮生の受くる利益昔日に倍し、云ふまでもなく、智識の交換、趣味の普遍、和己の増加、感情の融合等幾多の利益は、他日盡善盡美なる習學寮の生すべき基礎となるべきなり。

○歸寮門限を廢すべし

吾人は習學寮に在るの故を以て、郊外散歩の時間、及び用辨の時間等を、午后七時二十分までと制限せらるゝなり。何等の窮蹙をや。而して

又何等の必要ありて此門限なるものは設けられたるにや。勿論寮生をして規則的生活をなさしめんと、難有舎監の主意なるべきも、方今の有様にては、唯點檢に遅刻せざる限りは、手續書の徴せらるゝなく何等の制裁をも加へられざるなり。是れ主意と實際とは全然相反せるにあらずや、余は茲に於てか歸寮門限廢止を叫ぶものなり。

抑吾人は既に中等教育を終り、現に高等の教育を受けつゝあるものなり、己に腕白盛りの鼻液垂小僧にあらず、中學生時代の如き、似而非豪傑にあらず、其の身を處理し得る一個の青年なり、己に然り故に嫗母を要せず、父兄の監督亦從て寛なり。豈流連して己を忘れ、荒亡時を空うする如き、痴態を演ずるものならんや、必ずや、日を選んで出で、時を計りて入るべきなり、何ぞ事々敷規律を設けてこれを取締るの要あらん、或曰く、これ寮生の勤惰を査定せん爲めに設けられたるなりと、果して然らば益々滑稽に陥るべきなり。試に思へ、間限に遅刻せざるものが、

果して篤學の士なりやは一の疑問なからずや。且一人ありて若し門限に遅刻せざるも、寮内に在りて遊惰に流るゝとせば、舎監は何によりてかこれを識らんとする。又一人あり門鑑を所持せずして外出し、點檢以前に歸寮したりとせば、是れ亦何によりてか勤惰を定めん。然るに彼の通學生を見よ、何等の制裁なく、何人のこれを監するなきも、彼等の總てが遊惰に流れ學業を廢せるを聞かざるなり。斯の如くんば吾人寮生は、舎監より見る時は常に自墮落者なるか、將た襁褓の中にある如き兒童なるか。何等拘束を受くるの甚だしき。翻て考ふるに門限を廢止せば幾何の害を生ずるか。寮生をして自治の心を起しむるは論を俟たざるなり。故に自今全然門限を廢止すべし。從つて彼の點檢遅刻の如きは十分に制裁を加へて可なり、而して徐々に舎監の盛徳を以て寮生を感化し、終には點檢を廢するに至らしむべし。茲に至りて始めて舎監の職責其幾分盡せるものにして、寮生の眞面目もよく發揮したりと云ふを得べけんか。或曰く、門限

に遅刻せざることを一年に及べば特待生たるを得べしと、其れ然り豈其れ然らんや。

○龍南會各部々長

今回左の諸授を本會各部長に推薦し、皆その承諾を得たり。

演說部長 遠山教授 雜誌部長 高木教授
柔道部長 武藤教授 擊劍部長 會田教授
運動部長 渡邊教授 弓術部長 小溝教授
端艇部長 田川教授

○龍南會委員改選

本會規則に従ひ、委員の改選を行ひたるに、左の如く當選せり。

總務委員 池田 秀雄 杉村德次郎
演說部委員 福富卯一郎 江崎 規矩
雜誌部委員 惠利 武 松井與一郎
江上 恒之 猪股 勳
大野 至海
柔道部委員 丸田 富近 松居甚一郎
擊劍部委員 有田 秀介 黒田 孫一

運動部委員 岩松 玄十 後藤 文夫
弓術部委員 岩佐 歡二 宇野 鷹
端艇部委員 森 毓 寺田 規一
藤野 幹 原 正義
右の内、宇野鷹君は、都合により任を辭し、國武一男君就任せり。吾人は此際諸君が相譲り、相翕ふて、益々本會の爲に、濟々の績を底されんとを、切に望みて措かず。

○炊事委員長

第三學期習學寮炊事委員長は、左の如く撰定せり。

購入長 岩 松 玄十
會計長 東 野 稔
保管長 成 松 明 信

○寄贈雜誌書目

教育公報 二六八、二六九、帝國教育會
國士 五三、五四、造士會
廿 生 七、島根第三中學七生會

校友會雜誌	一二三	第一高等學校同會
嶽永會雜誌	二二、二二	第三高等學校同會
九州教育雜誌	二二三、二二四、二二五	九州教育雜誌社
獨逸語學雜誌	五年六、七	獨逸語學雜誌社
同窓會報告書	二八	福島縣安積中學同會
校友會雜誌	一八	三重縣第一中學同會
硯香	一一	福岡縣中學傳習館同會
校友會雜誌	三〇	東京開成中學同會
校友會雜誌	三	大分縣杵築中學同會
六合雜誌	三六六、三六七	日本にてりあん弘道會
實科教育	五、六	開發社
學友會報	一九、二〇	山口高等學校同會
校友會雜誌	二	第六高等學校同會
阪東太郎	三五	群馬縣前橋中學學同會
教育時論	六四四、六四五	開發社
崇廣	一八	滋賀縣第一中學同會
婦女會雜誌	八三	福岡縣中學明善校同會
校友會雜誌	九	大分縣中津中學同會
無盡燈	八卷四	無盡燈社

○任を去るに臨みて

去春花開きて任に就き、今春花落ちて將に任を

去らんとす。英才の士、卓抜の想を抱き、綢爛の筆を提げて、既に吾等の後にあり。今に及びて吾等の去るは、諸君に於て何等の損失なかるべしと雖も、吾等は去らんとして、諸君に懺悔すべき多くを有す。

吾等素非才淺識、筆に彩華なく、想に幽趣なし。吾等が一年の努力は、わが雜誌を飾りしよりも、寧ろ汚せしもの多きに過ぎたりしならん。然れども、吾人は自らを知らざる程に愚なるものにあらす、筆想の乾燥淺膚によりて、諸君の嗤笑と叱責とを招かんことは、初より吾等の期せしところ。たゞ一片耿々の心、潜に龍南の學風を憂ふるに於て、何人にも譲らざるべきを確信し、率直眞摯、走らざる筆を走らして、聊かわが校の爲めにせしものあるを思へり。然るに豈計らんや、龍南の學風は、吾等が任に在る間に於て、愈々益々、其の沈滯と沒理想と輕浮と無主義とを加へたりと云ふにあらすや。望むところ、もとより筆想の精華にあらすして、失ふところ、唯一の所期にあり。兩々共に採るべきもの

なくして今日に至る。悔恨失望、殫んぞ喪心せざらんとするも得べけんや。嗚呼、吾等、何等の厚顔か、よく先輩と諸君とに對せん。任を去るに臨みて、無能吾等の如きものをして、一年の間晏然として、この大任に坐せしめし諸君の洪量と雅懷とに、滿腔の感謝を致さずんばあらず。

明治三十六年三月三十一日

今岡信一郎

鴻巢盛廣

谷口保太郎

關一男

後藤文夫



○正 誤

「道家の無有論と盜賊説」と題する一篇の中に、左の誤植脱字あり。茲に訂正す。

誤	正
ページ 行	ページ 行
十 八	十 八
全 通家	全 通家
全 相對接	全 相對接
全 理論的解釋	全 理論的解釋
十一 二	十一 二
全 其の	全 其の
全 にはて	全 にはて
全 姑め	全 姑め
十三 六	十三 六
「最初の」	「最初の」
情なき事を得む	情なき事を得む
十四 十三	十四 十三
治めしむと	治めしむと
全 孟孫陽	全 孟孫陽
全 齊の國	全 齊の國
十五 十二	十五 十二
齊の國	齊の國
全 十三	全 十三
ゆゑ	ゆゑ
訂正	訂正
道家	道家
相接	相接
理論的解釋	理論的解釋
其の	其の
にては	にては
姑め	姑め
之を人といは	之を人といは
ざるを得む	ざるを得む
治めしむとも	治めしむとも
全 孟孫陽	全 孟孫陽
全 齊の國氏	全 齊の國氏
全 十八	全 十八
七尺の身	七尺の身
全 四圍	全 四圍
王倪や「を脱す」	王倪や「を脱す」
七尺の外	七尺の外
ページ 行	ページ 行
十五 十七	十五 十七
全 自然物とに	全 自然物とに
全 盜必ず	全 盜必ず
全 鈎敵	全 鈎敵
全 盜を凌	全 盜を凌
全 盜その	全 盜その
全 盜の傷	全 盜の傷
全 陰の傷	全 陰の傷
全 陰の傷	全 陰の傷
全 大を凌	全 大を凌
全 鈎敵	全 鈎敵
全 盜必ず	全 盜必ず
全 自然物との	全 自然物との
訂正	訂正
自然物との	自然物との
盜必ず	盜必ず
鈎敵	鈎敵
盜を凌	盜を凌
盜その	盜その
陰の傷	陰の傷
陰の傷	陰の傷
大を凌	大を凌
鈎敵	鈎敵
盜必ず	盜必ず
自然物との	自然物との